二〇一六年一〇月一一日　開催

難民の運命

■講演者……キム・チュイ（ヴェトナム系カナダ人作家）
■司会・通訳……仲村　愛（本学英米語学科非常勤講師）
■使用言語……フランス語（適宜、通訳あり）

キム・チュイ（Kim Thuy）氏紹介

一九六八年ヴェトナムのサイゴン（現ホーチミン）生まれ。一〇歳の時に難民（ボートピープル）としてマレーシアの難民キャンプを経てカナダに移住。通訳・法学を学んだ後、裁縫師、通訳、弁護士、レストラン経営など様々な職を経て小説家に転身。自身の難民移民としての経験に基づく小説『小川』（*Ru*）はカナダ総督文学賞を始め数々の文学賞を受賞するとともに、世界中で翻訳されている。

キム・チュイ

（執筆＝仲村　愛）

〈講演要旨〉

共産主義化したヴェトナム

まず、なぜどのようにして一〇歳の時にヴェトナムを離れることになったのかをお話しします。仏領植民地だったヴェトナムは一九五四年に南北に両断され、北ヴェトナムは共産主義に、南ヴェトナムはアメリカ合衆国に後援された資本主義になりました。戦争の末、一九七五年に北ヴェトナムが南ヴェトナムに勝利し占領しました。以後、ヴェトナムは共産主義国家となりました。

私は敗戦側であるサイゴン、現ホーチミン市の出身です。政治体制が変わり最初に起きたことは南ヴェトナムにあった全てに対する迫害でした。医者やエンジニアなど教育水準の高い人は皆投獄されました。資産を持っている全ての人が資本主義者として財産を没収されました。二階建ての家では、二階部分が政府の所有物とされ、共産軍が住みつきました。この共産軍は一四、五歳という年齢の時に北ヴェトナムを出

発し、戦時中何年もかけて南まで歩いて来て、自分の両親に会いに故郷に戻ることもできませんでした。我が家には一〇人の共産軍が入居し、家中の全財産が政府の所有物となりました。自宅の戸棚から米や砂糖、塩を取り出す権利がなくなりました。

各家族には毎月一〇〇グラムの豚肉が支給されました。お金があれば闇市で買うこともできました。どのように農場の豚を都市部まで運んだのかといえば、豚を棺の中に入れ葬儀を装って女性が運んでいくのです。豚が街に着いたら豚肉を切り分けてお腹周りに貼り付けて洋服で覆います。闇市に着くと捜査官が全身を触って身体検査をしますが、服の上から触ってもわかりません。そしてお肉を売る時には服を前開きにして開き、肉を切り分けて売り、そしてまた服を閉じます。こうして闇市で豚肉の売り買いをしていたのでした。

キム・チュイ氏

司会・通訳の仲村先生

ヴェトナム脱出

しかしヴェトナムを脱出した理由は別にありました。私たちがヴェトナムを去ったのは、一九七五年以降南ヴェトナムの人の大学に行く権利が剥脱されたからでした。一八歳男子は大学ではなく、ポルポト政権下のカンボジアか中越国境沿いの戦場に赴かなくてはなりませんでした。どちらに行っても死は確実でした。当時私には一七歳になる叔父がいましたが、叔父はもう大学に行くことはできず、カンボジアと中越国境のどちらかに行くしかありませんでした。

一九七八年は南ヴェトナムから脱出する人が多くなった年でした。ヴェトナム全土が閉鎖され、飛行機も電車も不通になっていたため、船なしで逃げ出すことは不可能でしたが、大部分の船は沈没していました。例えば私たちが出発した時には一〇艘の船が一緒に出発したのですが、マレーシアに到着したのはたったの三艘でした。七艘は沈没したのです。母は祖母に、叔父がヴェトナムに残るのと、私たちの家族と一緒に船で脱出するのと、どちらがいいか尋ねました。祖母は「ノン！　あんたは私の息子を殺すきかい！」と答えました。これに対して母は「あなたの息子はもう死んでいるわ」と言い返しました。あとは死に場所を選ぶだけだと母は祖母に言ったのです。カンボジアか中国かあるいは海か……。こうして叔父は私たちと一緒に船に乗ることになったのでした。

私たちの船は三×一二メートル平方の中に二一八人が乗ったので、ぎゅうぎゅう詰めでした。船は二階建てで、一か所だけ人々が乗り降りできるようスペースが残されていました。私たちは一階でした。足の踏み場もないほどの寿司詰め状態でした。四日間の船旅でした。嘔吐用にバケツが回されましたが、数が足りずたいていは自分の番になる前に吐いていました。超満員ですから、吐く時には目の前の人に向かって吐きかけてしまいました。でもこれはおあいこなのです。というのも、相手も自分に向かって吐きかけてきましたから（会場笑）。

私の正面には男の子の赤ちゃんを抱いた女性がいました。初めのうち、彼女はバケツが回ってくるのを待ってから赤ちゃんにおしっこをさせていました。彼女は片手で赤ちゃんを抱き、片手でバケツを持ち、そして赤ちゃんはまっすぐ私に向かっておしっこをしました。それで私の全身は赤ちゃんのおしっこで洗われました（会場笑）。赤ちゃんがおしっこをするときも避けることはできません。とにかく動けないほどぎゅうぎゅうだったので、避けることもできず、自分におしっこがかかるのをただ見ているしかありませんでした。

マレーシアの難民キャンプでの生活

ところで、人体とはとても丈夫なものです。船内は嘔吐や

排泄でひどい悪臭で、皆ただ木の板に座っているだけでした。しかし苦痛は一切感じなかったのです。四日間、足の痛みどころか臭いさえも感じませんでした。

人体の強さについてもう一例挙げましょう。私は生まれつき魚介、牛乳、卵、埃などに対してアレルギー体質でした。マレーシアに着いて最初の食事はいわしでしたが、四日間ほとんど何も食べていなかったので、空腹の極みで私も皆と同じようにいわしを食べることができました。難民キャンプでは七日中六日は魚を食べました。私のアレルギーはなくなったのでした。

もう一例挙げましょう。マレーシアには収容人数二〇〇人の難民キャンプに対して二〇〇〇人が流れ着きました。キャンプには屋根があり、柱が何本か建っていて、板で二階の床が敷かれており、壁はありませんでした。それが二〇〇人用の建物です。そのため二〇〇〇人はキャンプ周囲に寝泊まりしました。私たち家族の到着時、キャンプの周りさえも寝泊まりする地面は残っていませんでした。父が少し遠いところに丘を見つけてそこで寝ることにしました。しかし着いた瞬間、まるで壁にぶつかったかのような強い衝撃を受けて立ち止まりました。あまりにも悪臭がひどく、全員が一斉に歩みを止めました。夜のことで、電気がなかったため何も見えませんでした。父は言いました。「大丈夫、今夜はここで寝て明日になったら別の場所を探そう。」強烈な臭いで胸が苦しかったので、座って眠りました。翌日、丘の側面にぼっとん便所があるのを見つけました。穴の上にベニヤ板が二枚敷いてあり、その上にまたがって用を足す便所です。二〇〇人用の便所を二〇〇〇人が使用していたので糞尿があたりに溢れていました。私たちが寝ていた所からその便所まで目と鼻の先の距離でした。ところが鼻は臭いを感じるのをやめました。滞在した四か月間、他の臭いはわかるのに便所の臭いだけ感じなくなったのでした。

難民移民としての経験に基づく自伝的小説『小川』

マレーシアからカナダへ

ヴェトナムを脱出したヴェトナム人はマレーシア、タイ、インドネシア、フィリピン、香港などあちこちに行きました。当時、カナダ、オーストラリア、フランス、米国、スウェーデンなど難民を受け入れる国々の代表団が難民選抜のために東南アジア諸国を巡回していました。各国にはそれぞれの難民選抜基準があり、カナダの基準は金銭援助をしてくれるスポンサーがいるかどうかでした。私たちがマレーシアに到着してから最初に来た国がカナダだったため、カナダに行くことになりました。私たちの家族にはスポンサーはいませんでしたが、父がボランティアで通訳をしたためにカナダに選抜してもらうことができたのでした。

ところが私たちはカナダについて何一つ知りませんでした。当時はインターネットもなかったので、カナダの冬は一二か月間で、イグルーやイヌイットといったイメージしか抱いていませんでした。母はカナダ行きに反対しましたが、難民キャンプの環境があまりに劣悪だったので、父は「とりあえず行ってみて、後で別の国に行けばいい」と言いました。あれから三七年間カナダに住んでいますが、別の国に移ることはありませんでした。

ケベック州での新生活

両親がフランス語を話せたため、ケベック州に行くことになりました。ケベックにはフランス語憲章という法律により、すべての移民はフランス語を学習することが義務付けられています。しかし私は強制されたからではなく、ケベックの人たちに惚れ込んだためにフランス語を習得しました。

カナダは二年間の間に六万人のヴェトナム難民を受け入れました。私たちが着いた時、各家族にそれぞれボランティアの家族が付き添って難民を支援してくれました。パンを買う場所、アパートの見つけ方、運転免許の取得の仕方、そういった生活上の細々としたことを教えてくれました。私の一家を支援してくれた家族は私たちをお店に連れて行き、マットレスやコップやマグカップなどを買ってくれました。それらと一緒にトースターも買ってくれたのですが、米食の私たちにはトースターの使い方がわからず鏡がわりに使いました（笑）。

私たちが着いたケベック州のグランビーは人口五万人の何もない町です。唯一の遊べる場所が入園料の高い動物園でした。町の人たちはとても優しく、うちに訪ねてきては動物園に招待してくれました。土曜日の午前中にある家族が来て、午後には別の家族が来て、日曜日にはまた別の家族が来て…。何週間もの間、毎週末三回も動物園に行っていました。そのうち動物園の猿が私の顔を覚えてしまいました（会場笑）。

カナダへの愛が生まれた瞬間

しかしこういったことは全部後日談です。大切なのは、最初にグランビーに着いた瞬間のことです。私たちが町に到着してバスを降りた時、町中の人たちが出迎えてくれたかのようでした。到着した時、私たちは飢餓のため痩せ細っていました。食事や体を洗うための水が一日に一人あたり一リットルしかありませんでしたし、地面に直接寝ていたので、全身がとても汚れていました。マレーシアで虫にさされて体中に多くのただれがありました。頭はシラミだらけでした。そんな状態で到着したのです。

到着した瞬間、グランビーのカナダ人は飛びつくようにして抱きついてきました。難民キャンプには電気も水も、当然鏡もありませんでした。鏡はなくとも自分がいかに汚いかはよくわかっていました。ですから、グランビーの人たちが私をその腕で抱きかかえてくれたことはとても居心地が悪い思いがしました。しかもアジア人はボディタッチをお互いにあまりしませんから、これは最初のカルチャーショックでした。

私は今でも最初の瞬間に相手の瞳に自分が映っていたその眼差しを覚えています。それは私が人生のあらゆる時間の中で最も美しかった瞬間でした。私を受け止めてくれた人の眼差しに映った自分を見たあの瞬間ほど、自分が美しかったことはありません。その瞬間、私はケベックに恋に落ちました。私はその瞬間にカナダ人になったのであり、暮らしていくうちにカナダ人になったのではありませんでした。人が誰かに恋に落ちた時、相手の言語を学びたいと思うものです。私がフランス語を学び、今日フランス語で執筆することを選んだのは、このようなわけで愛に突き動かされているからなのです。

私を両腕で抱いてくれたあの人は、一体どのようにして痩せて汚かった私を抱きしめることができたのだろうと三五年以上の間ずっと自問し続けています。それは考えも及ばないほどの人間的な、あるいはそれ以上の寛容でした。

難民キャンプにいた時の写真が一枚残っています。小高い丘を背に並んだ家族写真です。その写真を見て「もし私がカナダ人だったら、こんな人たちは絶対選ばないわ」と父に言ったことがあります。なぜなら写真の人たちがカナダのために何かなし得ることがあるととても思えなかったからです。難民は過去も未来もなく、現在さえも本当にあるとはいえないような存在です。難民キャンプにいた時の私たちは国なき民だったのです。どこにも属さず、土地も国も言語もない……私たちには何もありませんでした。だからもし皆さんがテレビや新聞などで今日の難民の写真を見れば、難民キャンプで撮った家族写真に写っている私たちの眼差しと全く同じ虚ろな眼差しを見出すでしょう。当時の写真の人たちが現在、カ

ナダや米国で立派な職に就き高収入を得ていることは想像しがたいことです。もし難民キャンプに留まっていれば、今私はどうなっていたかわかりません。

一つの種子がその後どのように成長するか誰にも想像することはできません。ですから、今日の難民の眼差しから、彼らが将来社会に貢献する何者かになりうると信じることがとても難しいのはとてもよくわかります。私はカナダの大地に植えられた種の一例なのです。今私は守られていると感じながら世界中を旅する機会に恵まれた人間になりました。ですから本日、皆さんにこのようにいかにカナダが素晴らしいかをお伝えすることができる特権に預かり、大変光栄です。ありがとうございました。

学生からの質問に答えるチュイ氏

〈質疑応答〉

Q. 『小川』を読ませていただきました。同書に登場するいとこ(1)は今でも複雑な関係なのですか。

A. 確かに私にはいとこがいますが、『小川』のストーリーは必ずしも現実の話ではありません。彼女とは姉妹のように仲よしです。

Q. 本学職員です。私はヴェトナム生まれで、二三年前までヴェトナムに住んでいました。私は戦時中のヴェトナムについて知りませんが、一九七五年以前の南ヴェトナムの人々はどのように生き延びたのですか。なぜ一九七五年以前には脱出しなかったのですか。

A. 一九七五年以前のヴェトナムには戦争はありましたが検閲も迫害もありませんでした。しかし一九七五年以後、例えば読書や音楽を聴くことが禁止されました。また、毎週反文化的、反革命的だと思われる行動を見聞きしなかったかを告発することが求められました。そのため南ヴェトナムで少し力のある人にとって一九七五年以降は極めて困難な状況と

なったのです。さらに先ほどお話ししたように大学入学年の男子は戦場に送られました。これらが一九七五年以降になってからヴェトナムを脱出した理由です。

注

(1) 『小川』の主人公のいとこサオ・マイのこと。作中では、内気な主人公は皆から可愛がられるサオ・マイの「影」のような存在として描かれている。

参考資料

キム・チュイ『小川』山出裕子訳、彩流社、二〇一二年

講演終了後、講師を囲んで